

バンジャマン・フォンダーヌの肖像

『ボードレールと深淵の体験』をめぐって

内山 憲一

パンテオンの脇を抜けてクローヴィス通りへ、カルディナル・ルモワヌ通りに突き当たってから右折し、そぞろ歩きの私はコントレスカルブ広場へと向かっていた。2000年8月12日のことである。広場を一瞥してからモンジュ通りに下りて円形闘技場の跡でも見ようかと少し引き返し、最短経路と思われる狭いロラン通りに入っていった。その通りの端には段差があり、階段を下りるとモンジュ通りが走っているのである。歩きながらふと目を留めると、左側の建物の壁に一枚の比較的新しい記念プレートが設置されているのが目に入った。「Benjamin Fondane (Jassy, 1898 – Auschwitz, 1944)、フランスの詩人で哲学者は、1932年4月15日から1944年3月7日までこの家に住んだ…」。「アウシュヴィッツ」は文字通り衝撃だった。

以前からフォンダーヌの名前だけは知っていた。もともとは「神に向かい合う作家たち」というシリーズの一冊として出た本の再刊であるピエール・エマニュエルの『ボードレール、女と神¹』を読む機会があったが、巻末の書誌に載っているフォンダーヌの名前が記憶に残っていたのである。エマニュエルの本は最新の研究書に比べると厳密な実証性に欠けている趣があるが、ボードレールの不透明な生の壁に深く分け入り、その精神性を捉えようとする詩人の著作は、テキスト重視の生硬な研究書よりは興味深く読めた。エマニュエルは何回かフォンダーヌを引用している。しかし、その名前を覚えていたのは引用の内容というよりは、むしろ『ボードレールと深淵の体験』というフォンダーヌの本の印象的なタイトルによるものであった。ただし著者がどのような人であるかは、その時まで私はまったく知らなかったのである。

ルーマニアの Fundoianu

ルーマニア北東部、モルダヴィア地方の古都ヤーシ（ヤシ）で1898年11

¹ Pierre Emmanuel, *Baudelaire, la femme et Dieu*, Seuil, coll. Points 139, 1982.

月 14 日にフォンダーヌは生まれている²。本姓は Wechsler (Wexler)、英語式に発音するとウェクスラーとなるこの名前はユダヤ系であり、教育者でヘブライ語学者だった母方の祖父はヤーシで最初のユダヤ人学校を創設している。第二次世界大戦前の東欧におけるユダヤ人の数は世界のどの地域より多く、中でもルーマニアのユダヤ文化はポーランドに次いで多彩なものであり、人口の 4%ほどがユダヤ人であったという³。その宗教地図は世界的に見ても特に複雑で、現在に至るまでルーマニア正教会が多数派を占めてはいるが、プロテスタント系宗派やローマ・カトリック、戦後には正教会に組み入れられることになる東方派カトリックなども、重要な集団を形成していた。フォンダーヌのユダヤ系という出自の重要性は強調するまでもなく、詩人は実際にそのために命を落としているわけであるが、まずはコスモポリタンで柔軟な文化的環境の中で育ったと考えてよいのではないだろうか。

父方の祖父は Fundoiaia という地で農業をいとなんでいたという。1912 年、まだリセの学生であったフォンダーヌが地元の雑誌に寄稿した時のペンネームは Fundoianu であった。早くから文学を志していた若者はアイデンティティーを表す名前をこの先祖に由来する土地から借りたのである。その響きが喚起するものは後に Fondane という名前の中に組み込まれ、未来の詩人はいわば自らの中に永遠に息づいているこの土地の中に囲い込まれることになる。

リセの時代に始まったその早熟な文学活動を通して、アイデンティティー模索における試行錯誤が続いていた。その初期執筆活動を促したものは異なる二つの伝統・文化である。Alex Vilara, B. Fundoianu といったルーマニア的響きのペンネームで象徴派風の詩やフランス等西欧の詩人たちの翻訳を文芸誌に発表する一方、フォンダーヌはユダヤ系の雑誌に Ofir, Ha-shir といったヘブライ的な名前でイディッシュ語詩人たちの翻訳や聖書に題材を取った自らの詩を発表している。「私はこれから進むべき道を模索していたが、自分の後ろにはいかなる過去もなく、自分の気質が伝統を欲しがっていることに驚いていた。(…) 私には父が、伝統が、遺産が必要だった。(…) 私はただち

² 以下に続くフォンダーヌの伝記的事実については、主に *Europe* 誌のフォンダーヌ特集号(No 827, mars 1998)中の論文や対談と *Repères chronologiques, Dictionnaire de Poésie, de Baudelaire à nos jours* (Presses Universitaires de France, 2001), *Le Nouveau Dictionnaire des auteurs* (Robert Laffont, 1994)に依拠した。

³ ルーマニアのユダヤ文化については田辺裕監修『図説大百科世界の地理 13 東ヨーロッパ』(朝倉書店、2000 年)の項目「ルーマニア」「ユダヤ人：分散した人々」を参照した。

にシオニズムではなくユダヤ教へと戻ったのである⁴。」1919年にフォンダーヌは、自分の出自に関わる集団の前世紀末から高まりを見せている政治的な動きではなく、あくまでも自らの詩人としての資質にこだわり、このように書き記している。フォンダーヌ特集を組んだ *Europe* 誌 827号 (1998年3月) に掲載されている、若き詩人が1917年に母国語で書いた聖書に題材を取った詩を見てみよう (同誌 41-44頁)。タイトルは「らい病患者の詩 *Le psaume du lépreux*」である。

「暁は (…) 椰子の木の中に数多の炎を放った (…) まるで一つ一つの炎の中にあなたがおられるようだ、神よ！あなたの前に私はひれ伏したい——雷に打たれたように。」らい病患者は炎の中の神に近づきたいのだが、神が六日間で創りたもうた万物を汚すのではないかと恐れる。「なぜなら私の身体は膿胞ではちきれそうだからです (…) 私はヒキガエルが鳴く泥沼です (…) 私の心もまた倦み疲れたヒキガエルのように、おお神よ、あなたの方へ鳴声をあげます。」絶対的な存在の前でへりくだり被造物の虚無を意識するのは通常の宗教的感情であろうが、フォンダーヌの詩学を考えるにあたって見逃すことのできない要素がこの断片的な詩句の中に現れている。それは自らを徹底的に醜い存在であるとみなす意識である。幼年時を回想して、「私は醜かった (…) オランウータンのように醜かった」と自分の容貌を述べた文章が含まれる「日記」の断片のフランス語訳が同じく *Europe* 誌の中に掲載されている (34-40頁)。これは、すでに公に文学活動を開始していた詩人の文学的な「日記」である。執筆は萌芽的なものが1912年、中断後の再開が1914年とあるが、「その時以来18年経った」という表現も見られ、かなり虚構性の強い文章である。揺りかごに寝かされた乳児の自分を「回想」する散文詩のような文章に注目してみたい。

〔母が口ずさむ〕歌は古めかしく、古風で、風変わりで、かなたから来たものだった。それは苦しみと苦悩から生まれたもので、透き通る水のような調べの中に思いがけない貝殻やきめ細かな真珠を映していた。歌は遙かな岸辺からやって来るのだが、そこには橙やマンダリンが生え、青い湖が山々の巒に隠れ、杉や椰子の森がある郷があり、陽はナデシコのように紅く降り注ぎ、そこに住む人々は生き生きとして、風変わりで、なじみのない人たちだった。花瓶のタチアオイの香りに陶然としながら歌を聴きつつ、私はその調べに打ち負かされ寝入るのであった。というのは醜い人たちでも心地よい調べには敏感でありうるのだから。

⁴ Léon Volovici, « Métamorphoses de l'identité », *Europe*(No 827), p.8.

後年、思弁的な詩を書き哲学的な書を著す思索家フォンダーヌの叙情詩人としての資質を窺わせる美しい散文であるが、ここでは最後の文章が重要である。己の「醜さ」の自覚の背後には不完全な存在としての人間が被る有限性の自覚があり、その有限性への形而上的な反抗というフォンダーヌの詩学の特質が垣間見られるからである。己の「醜さ」を強く自覚するからこそ、世界の諧調に敏感なのである。

詩篇「らい病患者の詩」冒頭には銘句として旧約聖書『レヴィ記』13章、45-46節が置かれている。それによると、らい病罹患が判明した者は破れた衣を身に着け、口ひげに至るまで身を覆い、「穢れた者です、穢れた者です！」と他者に警告の叫びを上げなければならない⁵。罹患者はこの「傷」を抱え込んで共同体の外にはじき出されたまま生きていかなければならない。「膿胞ではちきれそうな」己の身体を「ヒキガエルのうごめく泥沼」に喩えた者の叫びを歌った若きフォンダーヌの詩は、明らかに単なる文学的虚構の枠には収まらないように見える。

ユダヤ・キリスト教の伝承という枠組みから逸脱しようとする部分こそが、この詩篇の本質である。絶対者への「私」の叫びが転調する詩篇の続きを見てみよう。「ああ、あなたも私のようにらい病を患い、あなたの皮膚も膿胞に覆われているのなら(…)」穢れを自覚する「私」はついにはこう叫ぶざるを得ない。「非-存在から出て、私はあなたと対等のものでした(…)私の非-知はあなたの知、私の弱さはあなたに力を与えます。そして私の穢れからあなたの光は生まれるのです。」この絶対者に対する意識の揺れ、絶対者と穢れた己との間には本質的な断裂がないとでも言うような叫びは、若き詩人が成熟していく方向を雄弁に指し示している。「私は(…)ユダヤ教へと戻ったのである」という宣言にもかかわらず、1919年以降にフォンダーヌがたどる道は、より開かれた世界へと向くことになるのである。

1919年、第一次世界大戦後の高揚した世相の中で、フォンダーヌは故郷のヤーシを去り、首都ブカレストへと移り住む。二十歳を過ぎたばかりではあるが、首都での文学者としての活動は精力的で、複数の雑誌に執筆活動が続ける。その中で特にフランス語圏文学に関わる記事(ボードレール、フローベール、マラルメ、ユイスマンス、プルースト、クロードルなどとベルギーのメーテルランク、ヴェラーレン)の選集を1921年に上梓し、ルーマニアの文学がフランス語による文学に従属していると主張するその序文が激しい批

⁵ 新共同訳聖書(共同訳聖書実行委員会、1987)においては、「らい病」にかえて「重い皮膚病」とする表現上の配慮がなされている。

判を引き起こす。1922年には女優であった姉や義兄などと共にアヴァンギャルド系の劇団を創設、モリエールなどの古典から創作劇まで上演し、脚本執筆にも手を染めている。むしろ、経済的理由と反ユダヤ運動の影響で、その劇団は翌1923年には解散となり、同年12月にいよいよパリに移り住む。ちなみに、姉夫婦もまた翌年にフォンダーヌを追ってパリに出るが、後述するように詩人はこの姉と最後まで運命を共にしている。

1917年から、このフォンダーヌの活動の転機となる1923年までに母国語で書かれた詩は、後1930年に『風景』という総タイトルのもとにブカレストで出版されることになる⁶。その「風景」とは何か。「風景は常に同じものであるだろう。風景を創り出すのはこの自分であることが私には充分すぎるほどに分かっている」と詩人は書き記している⁷。それはまるで、風景と言わず外部にあるものはすべて自己の内面が投影されたものであるかのような。内面のヴィジョンを自然に投影することにより鋭い感受性を示したフォンダーヌは、後に20世紀ルーマニアの詩的言語改革者の一人として位置付けられるまでになっている。

パリの Fondane

ベルギーのある出版社からの「あなたはなぜ詩を書くのですか？」という質問に対して、フォンダーヌは書くことの動機を問われること自体に驚きながら、8歳の頃からものを書いている彼としては、それは「生体機能」のようなもの、ごく自然な行為であり、「むしろ私には、ものを書かない人がいることのほうが奇異なことに思えます」と答えている⁸。彼は素直に答えたのであろうが、状況によっては挑発的な物言いだと誤解されてもおかしくはない。若い頃のフォンダーヌは矛盾する傾向を抱え込んでいたらしく、その曖昧でつかみ所のない人柄については周りの者たちの評価は分かれて、激賞する者も誹謗する者もいたそうである。

ボードレールを始めとするフランス文学をすでに血肉化するまでに読み込み吸収し、過激にもその「優越性」に対する自国の文学の「従属性」を説くまでに至った若者は、問題なく現実のフランス社会に適応していったのだ

⁶ フランス語訳は *Le Mal des fantômes, précédé de Paysages*, Paris- Méditerranée, 1996 に収録されている。

⁷ Mircea Martin, « Les paysages de Benjamin Fondane », *Europe*(No 827), p.54.

⁸ Léon Volovici, article cité, p.7.

ろうか。異なる言語・異なる思考の社会に移り住み、活動を続けた文学者の一例として興味深い問題ではある。まもなくフランス語で詩を書き始める若者にとっては、少なくとも言語に関する大きな問題はなかったのではないだろうか。ある知人の証言によると、10 数年後、フォンダーヌが耳障りな声で話すフランス語にはまったくルーマニア語のアクセントがなく、むしろ「パリ訛り」が認められたという。

さて、1923 年 12 月にパリに着いた後、故国でのペンネーム *Fundoianu* をフランス語風に変え、*Fondane* と名乗るようになった詩人は、様々な文学者との交流を始める。けれども、トリスタン・ツァラを生み出したルーマニアから来た若者で、アヴァンギャルドの詩人でもあったフォンダーヌは、意外なことにシュルレアリストたちの活動に全面的に与することはなかった。フォンダーヌにはシュルレアリストたちが「無意識を理性的に探索している⁹」ように思えたようである。むしろ、ブルトンが率いる運動の周辺に位置し、涇流とされるような詩人たち、例えば雑誌としては後 1928 年に創刊されることになる *Le Grand Jeu* のグループなどとフォンダーヌは交流することになる。しかし、彼の生涯における決定的な転機となったのは 1924 年春、ロシア出身の哲学者シェストフとの出会いであった¹⁰。

ロシア革命後にパリに移住し、パリ大学教授にもなったこの哲学者は実存主義思想の先駆者とされ、カミュやガブリエル・マルセルに影響を与えた人物として知られている。実はルーマニア時代にフォンダーヌはすでにシェストフを「発見」していて、パリに出る直前にはシェストフの『死の啓示』について一連の書評も発表していた。ただし、著者が物故者なのか生きているのかさえ知らなかったそうである。パリへの到着から数ヵ月後に、東欧から来た若者は友人の哲学者の家で、一人の「背が高くてやせた老人」に出会うわけであるが、この偶然の出会いがいかに運命的なものであったかを理解するためには、フォンダーヌの当時の精神状況を知らなければならない。

ルーマニア時代のフォンダーヌは詩、演劇に関するものと批評的テキストしか執筆せず、哲学に関しては門外漢と言ってよかった。ただ詩的なものに彼は信を置いていたのである。世界を審美的に解明するというマラルメの

⁹ *Dictionnaire de Poésie, de Baudelaire à nos jours* を参照。Fondane については *Europe* 誌の特集号を主導している Monique Jutrin が執筆している。

¹⁰ Lev Shestov(1866-1938)。名の Lev はフランスでは通称 Léon で、姓は通例 Chestov と表記される。以下、シェストフとの出会いが意味するものについては主に Michel Carassou, « Fondane parle de Chestov », *Europe*(No 827), pp.107-109 を参照した。

な夢に憑かれ、詩のみがこの大胆な試みにおける有効な手立てであると確信していたフォンダーヌが、突然にその観念論的な眠りから目を覚ます。それまで生きる糧であった詩が実は偽りに満ちたもの、美のマスクで無残な現実を単に覆い隠しているだけのものではないかと思えてくる。言葉から解放され、言葉が課す規範や制限から解放された無声映画だけが魅力的に見える…そのような日々が続く。フランスに渡り新しい生活を始めるフォンダーヌは深い精神的危機を抱えていた。

けれども、詩が自分にとって何らかの意味を持つことは分かっている。自分の中の何かに直接触れるもの、心の奥底に胎動し理性の網の目を逃れるものに働きかけるもの、詩がそのようなものであることは直観的に分かっている。己の中にある柔らかで微妙なものを捕捉するには、哲学はあまりにも理性に頼りすぎているように見える。ブルトンという強力な磁極に集まる詩人たちの活動もまた彼の肌には合わない。そのような時に天啓のようにシェストフが目の前に現れたのである。同郷のトルストイやドストエフスキーを読み込み、パスカルやキルケゴール、ニーチェに影響を受けたこの哲学者は、同じく東方からやって来た若者に哲学的著作に親しむように勧める。彼の説く哲学はフォンダーヌが考えていたようなものではなく、理性に立脚しているとされる合理主義哲学の明証性の土台を突き崩すようなもの、生の不合理・無償性に焦点を当てるものであった。彼らの交際が徐々に深まっていくにつれ、フォンダーヌは自分が詩を通して求めていたものと、シェストフが「明証的なるものとの闘い¹¹」と呼ぶものを通して求めているものが同根のものであるという認識を深めていく。

1925年、ブカレストで創刊されたアヴァンギャルド系の雑誌の編集をパリからサポートし、数々の記事をフランス語で執筆する。フランス語による最初の詩「フランス語の練習」が別の雑誌に掲載されるのもこの年である。詩においても批評的テキストにおいても、フランス語による執筆と発表は以後継続して行われている。シェストフの思想の紹介にも努め、1929年、*Europe*誌に「悲劇的哲学者：レオン・シェストフ」を公表、同年夏から秋にかけては招待されアルゼンチンに渡り、ブエノスアイレス大学でシェストフについての講演を行う。1930年、フランス語による最初のまとまった著作『無頼者ランボー』の第一稿を仕上げるが、原稿はフォンダーヌが望んだガリマル社に結局受け入れられることはなく、決定稿の出版は3年後にドゥノエル社

¹¹ cf. Benjamin Fondane, « Un nouveau visage de Dieu », *Europe*(No 827), p.120.

からとなる。前述のように1917年から23年までに母国語で書いた詩の集成『風景』を故国ルーマニアで出版するのを始めとして、1930年代は詩においても文芸・演劇批評においても、シェストフの影響のもとに哲学関連においても旺盛な執筆活動が続くが、映画のパラマウント社にシナリオライター兼助監督としての仕事を得たこともあり、映画関連の記事も多く手がけることになる。1931年7月に結婚し、その翌年の4月15日に前述のようにパリ5区のロラン通り6番地に居を定める。強国に囲まれ、政治的に翻弄され続けた国からやってきたフォンダーヌはまだフランス国籍を取得してはいなかった。シェストフを介して知り合ったマルティン・ブーバーのようにドイツの政情に通じたフランス国外の知識人との私的な接触も多く¹²、全ヨーロッパ的な規模で始まっていた不穏な時代のうねりに、外面的にはどうであれ特に敏感であったはずである。

シェストフは1938年に亡くなるが、その弟子を自認するフォンダーヌはジャック・マリタンなど当時を代表する知性と交流を持ち、師が代表していた実存主義的な哲学の代弁者の一人となっていた。同じ1938年には念願のフランス国籍を取得するが、翌年ドイツ軍との戦いが始まり、1940年にフランス国民として動員される。同年、捕らえられ捕虜となるが脱走し再び召集、胃潰瘍を病み除隊となる。1941年冬から翌年にかけて『ボードレールと深淵の体験』を執筆するが完成には至らない。1942年、アルゼンチンの友人たちはユダヤ人であるフォンダーヌの身を心配して呼び寄せようと画策するが、結局彼はドイツ軍占領下のパリにとどまることを選択する。同じくルーマニア出身の思想家シオランは当時のフォンダーヌを回想して、しきりに「気高い noble」という言葉で彼を形容している¹³。その言葉の意味するところは、幸福という観念とは相容れない内面の気質的な苦悩を抱えながら、日常的な気苦労からは超絶し、「敬虔な精神」と「形而上的な誇り」を備えた姿である。ますます不穏になる情勢に、妻や友人たちがアパルトマンにこもっているように懇願しても、フォンダーヌは自由に街中を出歩き、ビストロでドイツ軍将校たちの近くに居合わせても動ずることはなかったが、もちろんそれは挑発や空威張りではなく、「気高い」フォンダーヌにとっては自然な態度であったという。

¹² ナチ스에迫害されフランクフルト大学教授の職を追われたばかりのユダヤ系哲学者ブーバーとは1934年春に接触している。

¹³ «Fondane au-delà de la philosophie»(Entretien d'Arta Lucescu avec E.M.Cioran), *Europe*(No 827), pp.15-22.

そんな彼にもついに当局の手は及び、1944年3月7日、夫の亡き後もパリにとどまっていた姉と共にフォンダヌはフランスの警察に拘束され、ユダヤ人の国内中継収容所のあるパリ北東部のドランシーへと送られる。友人たちの努力が功を奏して、「アーリア人の配偶者」であるフォンダヌの釈放が一旦は許可されるが、自分にのみ与えられる自由を拒否し、弟は姉と運命を共にすることを選択する。二人がアウシュヴィッツへと移送されるのは5月30日、フォンダヌがガス室に消えたのは10月の2日、あるいは3日のこととされている。

『ボードレールと深淵の体験』をめぐる

フォンダヌは1932年より *Cahiers du Sud* 誌を主な発表の場としていた。主要部分を書き上げられていた『ボードレールと深淵の体験』も、その一部分が1943年1月に同誌に発表されている。続けて別の断片も同年 *Domaine français* 誌に掲載されるが、結局は未完に終わり、セゲール社からのまとまった形の出版は戦後の1947年を待たなければならなかった。未完とはいえ、フォンダヌ生誕100年目が近づき再評価の動きが高まっていた1994年にブリュッセルのコンプレックス社から再刊されているものを見ると¹⁴、序文を除いた本文の433ページという長さからしても、ダンテ、シェイクスピア、カフカ等のフランス文学の枠を越えた比較の対象の広さからしても、実に堂々たる著作である。

発表された部分の続きが著者になじみの *Cahiers du Sud* 誌に継続して掲載されていかなかった理由は分かっている。フォンダヌとは長年の付き合いで、そのフランス国籍取得を手助けまでした編集長ジャン・バラールが、著者がユダヤ系であることを考慮して、ドイツ軍占領下で検閲も厳しい状況の中での発表に慎重になりすぎたのである。連行される直前の1944年1月、バラールに宛てた最後の手紙の中で、発表の場が十分に確保されなかったことにフォンダヌは苛立ち、ボードレール論の意味するところを理解しなかったと友人を非難している¹⁵。実は1943年に *Cahiers du Sud* 誌に掲載された部分稿からも重要な2ページ分が省かれていたのである。1994年に再刊されたボードレール論には、雑誌発表時には省かれた2ページ分が本文の前に「序

¹⁴ Benjamin Fondane, *Baudelaire et l'expérience du gouffre*, Bruxelles, Editions Complexe, 1994.

¹⁵ « Dernière lettre de Benjamin Fondane à Jean Ballard », *Europe*(No 827), pp.170-174.

文にかえて」として掲載されている。1942年中に書き記されたその短文の中で、フォンダーヌはすでに序文を書くことは不可能であるとしている。「時間が迫っている。どこかで一艘の船が私を待っているのだ。」このように焦燥に駆られる詩人が予感しているのは、そこに行ってしまうば校正刷りを直すこともできず、序文を書くこともできず、できあがった本を見ることさえできないようなところ、「私の考えや、さらには綴り字間違いや(…)私がこの世に生まれたという事実そのものなどによって引き起こすことになる大異変を前にして読者が発するであろう驚愕の叫びを聞くことができないような国」である。滑稽味を装っているだけに、迫りつつある不幸を予感しながら書かれたようなその文面はなおさら悲痛である。

過失は私にはない。私がこんな時代を、(…)混乱を極めたこんな状況を、途方にくれた私には何も分からないこんな紛糾した筋書きを作ったわけではないのだ。(…)私たちはまた別の機会にこの本について話をするにしよう。もしこれを一つの時代と呼んでもよいものならば、このような時代に私がこの本を書いて発表した理由について話してみよう。もちろん神が(あるいは摂理、または「歴史」が)それを許すならば、また話をするにしよう。とりあえずは私も彼に倣うことにしたい。あの船がどこかで私を待っている。さようなら、フランスよ!

苦渋に満ちたフォンダーヌの文面は確かに占領軍から見ると批判となっており、バラールの慎重な自己検閲は半世紀以上の間隔を経た現在から見ても妥当なものかもしれない。注意しなければならないのは、詩人の筆致には何か現状に対する不満よりも射程が広いものが垣間見られる点である。運命と言おうか、「摂理」と言おうか、そのようなものに対峙しようとする姿勢は、二度繰り返し現れる印象的な「船」が自分を待ち受けていると感じることに表れている。

詩人であるフォンダーヌが書いた『ボードレールと深淵の体験』には、この「船」のような、あるいは命あるもののごとくに語られる「深淵」のような、鮮やかな詩的イメージが遍在する散文詩や哲学的コントのように読むことができる。その筆致は全般的に神秘主義の色が濃く、時には実証性に欠けているように見えるが、それはボードレールの生の不透明な厚みに詩人として直観的に対峙したからではないだろうか。私がフォンダーヌの名を知ったのは前述のように、同じく詩人であるピエール・エマニュエルの『ボードレール、女と神』を通じてであったが、そのボードレール論もまたネオ・プラトニズムに彩られた神秘性の濃いものであった。

エマニュエルは、人類の記憶の中に潜んでいる原初的な「傷」を自らの生そのもので証しするような存在としてボードレールを捉えている。その「傷」とは失われた楽園という神話、果てしのない転落という神話の基調として現れている。本源なるものを〈神〉と名づけるならば、〈神〉はそれに追放された人間という普遍的な神話を通して現れるが、この神話が実際に示すのは人間による〈神〉の拒否である。ボードレールは誰よりもこの「罪」を真摯に受け止め、彼自身の拒否に苦悩する。その生涯は本源なるものとの対峙の謎に満ちた解説表として捉えることができるとエマニュエルは考えている。彼はフォンダーヌのボードレール論から計5箇所引用しているが、例えば次のような引用箇所が目につく。

彼〔ボードレール〕が自らの自我に対して抱いている嫌悪は単に哲学的なものではない。それは神聖なもの（…）であって、まさしく十字架の聖ヨハネの場合と同様である。己の自我に打ち克ち、否認すること、このような代価を払ってこそ救いはもたらされるのだ！その理想主義的な情念の中に、さらに彼は中世的で、ダンテが描くような、カトリック的で、神秘的な情念までも持ち込んでいる。善と悪とは、彼にとってはまだ内実があるもの、厚みを持つものである。彼が求める虚無とは純然たる虚無ではなく、〈闇〉そのものなのである¹⁶。

エマニュエルはこの引用に続けて、詩作品を聖なる言葉と考える誘惑、自足的な宗教性をキリスト教信仰に置き換えて解釈しようとする批評の傾向に批判的に言及している。ボードレールの宗教的な想像力の問題と信仰の問題とは確かに区別しなければならない。しかしここでは、フォンダーヌの主張が妥当かどうかという問題は差し置き、そのボードレール論を通してフォンダーヌ自身にとって詩とは何かという問題を考えてみたい。ともかく、フォンダーヌ自身がボードレールにおける善や悪を単なる抽象概念としては捉えていないのである。『悪の花』の詩人の二編——「なぜなら私は、虚無と暗黒と赤裸とを求めるのだから！／けれども闇はそれ自体が画布であり（…）」（『妄執 *Obsession*』）、「私の夜という基調に重ねて、神はその巧みな指で／形さまざまな絶え間なき悪夢を描くのだ」（『深淵』 *Le Gouffre*）——を読み込んだ上で、フォンダーヌ自身がボードレールの「虚無」を抽象概念ではなく実体的厚みのある「闇 *ténèbres*」として捉えているのである。そのような解釈を通して浮かび上がってくるフォンダーヌの詩学はどのようなものだろうか。

¹⁶ *Baudelaire et l'expérience du gouffre*, pp.92-93. ;Emmanuel, *op.cit.*,pp.22-23.

未完となったボードレール論の最後の節につけられた注の中で、ボードレールの作品の重要性は人々の日常的な時間の中に一種の亀裂をもたらしていること、すなわち道徳もタブーも何もないような、ある無時間的な祝祭性を帯びていることに起因している、とフォンダーヌは書き記している(433)¹⁷。この言わば魔術的非時間性とでもいうべき特徴は特に晩年のネルヴァルの詩にも当てはまるものであるが、これと人間の生の有限性への形而上的反抗は、もちろん表裏一体のものである。フォンダーヌは一方では流れ去る時間の中で死に向かって老いていく人間、ちょうどあの「らい病患者の詩」に見られるような醜さと無力とを抱えながら有限の生の中でもがき苦しむ人間の呪詛を代弁し、他方では無時間的・原初的なものへの憧憬を歌っている。

フォンダーヌによると、ボードレールは詩のある秘密を再発見した。その秘密とは言うてみればあたりまえのことである。不可視のものを探り聞こえないものを聴こうとする詩は、人間という存在のすべてを、中庸だけではなく、その存在の極みにある属性を含めてすべてを要求するものである。フォンダーヌがパスカルをダンテやシェイクスピアやボードレールの精神的同族とみなし評価するのも、パスカルが「すべての極端なるものから離れることを特徴とする伝統というこの風土の中で、過度なるもの、絶対なるもの、深遠なるものを避けようとはしなかった、おそらくはただ一人の者(246)」だったからである。もっとも、人はこの絶対なるものにたどり着くことはできない。シェイクスピアといえども「未開拓の天才」であり、完璧に磨かれてはいないその作品にはひびや亀裂の萌芽が認められる。けれども、われわれはそのひびや亀裂を認めた上でなお、魔術なき表現よりは「ほつれの見える魔術」を、取り繕った調和よりも「生きている奇形」を、あるいはボードレールの散文詩「貧しい者の玩具」をもじって言えば、おもちゃよりは「生きているねずみ」の方を好むのである(401)。

有限性の中に閉じ込められた人間にできることは何か。それは無限なるものに対して叫びの声を上げることである。折りにおいてと同様に、詩歌の起源には、旧約聖書に登場するヨブが上げたような形而上的な叫びがあった。「形而上学とは殴打におびえる人の思考ではなく、現実なるものに気を悪くし、不可避なるものに傷つき、人間が持つ有限性に対して怒りと反抗心に満

¹⁷ 括弧内の数字は以後 *Baudelaire et l'expérience du gouffre* のページを指示することとする。

ちた人の思考である¹⁸。」フォンダーヌにとっては、この叫びを表現することが詩の創造である。それは彼にとって生理的とも言い得る欲求、決然たる一つの行為であり、気晴らしや娯楽ではない。

しかし、そのような観点から詩を捉えるならば、その創造行為に内在する問題にわれわれは気づくことになる。本物の叫び、つまり神に向けて実際に叫ばれたヨブの叫びは、後から詩の中に記録された叫びとは本質的に同一のものとは言えないのではないか。詩を書くということ、芸術的創造をすることは、実際にはシエストフの言う「明証的なものとの闘い」という実効性は持ち得ない。フォンダーヌによると、それは「偽りの体験 *expérience fausse*」である。「ボードレールはまず、詩は〈体系的に偽りの〉体験、〈我欲す〉の純然たる技巧であると表明することから始めていた (249)。」詩の体験が「体系的に偽りの」体験ではないとすれば、詩は詩ではなくなることになる。もちろん、この「偽り」は否定的形容ではないということを強調しなければならない。それは曖昧で両義性ある言葉として理解すべきものである。「偽り」も何ものかの表れではあり、真正なる叫びの痕跡はとどめているのである。ここでは、「偽りの体験」を意識するボードレールと詩の関係、ボードレールと芸術の関係に留意しなければならない。その意識こそがボードレールの革新的な新しさだとフォンダーヌは考えるのである。

ボードレールの〔詩の〕きわめて新しい点は、まさしく「逃避の非現実性」を彼が意識していたということ、そして自分が何か不自然なものを持ち、自分が不自然であると意識していたことにある。(…) 彼はそれを知る最初の人であったが、われわれは芸術をいんちきなものに、〈深淵〉の恐ろしさを覆い隠すにはうってつけのからくりにしたのだ (106)。

フォンダーヌがボードレール論のタイトルに組み込み、時には擬人化して大文字で、他のところでは小文字で使用しているこの「深淵 *gouffre*」とは何だろうか。ただちに見て取れるように、それはまずフォンダーヌがボードレール自身のテキストから抜き出した言葉である。「パスカルは憑いて動く彼の深淵を持っていた」(「深淵」)。「〈芸術〉の陶酔は他のいかなる陶酔よりも、深淵の恐ろしさを覆い隠すには適している」(「英雄的な死」)。ボードレールにとって、それは「実在」するものであり、彼の生からそれを引き離すことはできない。「深淵の実在 *réalité*」——「深淵とは (…) そこから人が逃

¹⁸ Benjamin Fondane, *La Conscience malheureuse*, Plasma, 1979, p.245.

避する、より高次の実在にすぎない(107)」。それは恐れさせるとともに、魅惑するものでもある。ヨブやパスカルにとっての「深淵の体験」を説明する中で、フォンダーヌはそれを「不条理 l'absurde」の体験、「不連続なるもの le discontinu」の体験と置き換えている。「もう何も見えないように彼らから目を取り去ってみればよい。でも彼らは、目は何の役にも立たない、体験が、彼らだけの体験が新しい目を与えてくれた(…)と言うだろう¹⁹。」一方前述のように、フォンダーヌはパスカルをボードレルの精神的同族とし、「過度なるもの、絶対なるもの、深遠なるもの」から逃れようとはしなかったパスカルの深淵をボードレルは自らのそれと同一視していたとしている。それではパスカルの深淵とは何か。それは思弁にはよらない一種の啓示である。すなわち、理性には確実性や保証が無く、それを理性に求めてはならない(247)。

われわれはボードレルとパスカルが二人とも幾何学者であるということを見てきたが(…)そこへ(深淵)はやって来て、両者を共にある袋小路から引き出し、他の袋小路へと投げ入れたのである。この深淵、それは自分たちがどんなに堅固で確実なものと思っていたことであっても実は拠りどころがなく、思い込みは否応無しに諦めなければならないということ、われわれはみな一種の眩惑に捕らえられていて、そのような眩惑のもとにあると仮定しない限り、この世のことは説明不可能であるという直観であった(251)。

深淵とはこのような直観であり、同時にその直観が啓示する何かであり、より高次の「実在」であり、多義的な場である。フォンダーヌは詩人らしい表現を織り合わせ、様々な角度からボードレルを魅了し恐れさせる深淵を描いている。この深淵はもちろん、神秘学が説く深淵、すなわち一般に時間と場所から解放されたところ、創造者と被造物との差異がなくなるような深みとも通低するものである。無限なるものがこの深淵という場に在るとすれば、ヨブの叫びはこの深淵に向けられたものとなる。上下の関係はここでは意味をなさない。フォンダーヌが「跳躍 saut」などの言葉ではなく「深淵」という言葉を選んだのは、それに対峙する者の受動的立場を考えただけではないだろうか。なぜならそれは否応無しに呑み込むものだからである。けれどもエマニュエルが考えるように、深淵は他の所へ、たとえそこが「他の袋小路」ではあっても向こう側へと移動させる通路ともなり得る場であるのかもしれない。

¹⁹ Benjamin Fondane, « Un nouveau visage de Dieu », article cité, p.119.

一つの道(chemin)ともなり得る深淵の両義性。物質の中にまぎれて、本源の似姿はまたそこに隠されてもいるのだ²⁰。

フォンダーヌのボードレー尔論は、「詩を必要とすることは詩とはまったく異なるものを必要とするということである」(417)を結語とする第32章でひとまず脱稿ということになっていた。ところが、偶然に手にしたバーナード・ショーの『人と超人』冒頭の書簡体献辞に触発されて、詩人は再び筆を取ることになる。しばらく書き継がれ、結局は第34章で中断されることになるが、その中断箇所もまた2章前の結語のように印象的で、まるで割れた鉱石の断面のような輝きを放っていると言えば少々大げさにならうか。フォンダーヌはそこで、ボードレー尔とシェイクスピアの著作の中に今でも輝いている反映、「極限なるもの」と触れ合った痕跡の反映に言及し、その輝きを「主の栄光」に臨み、山から下りてきたばかりの古代の〈預言者〉の顔に輝いていたとされる光に喩えている(433)。

所々に「ひび」や「亀裂」も認められる未完の著作である『ボードレー尔と深淵の体験』は、その生の最後の「体験」、不条理と絶対的な悪との遭遇をまさに生きようとしていた詩人がわれわれに書き残した証言という様相を帯びている。その重みを十全に受けとめることは、おそらくフォンダーヌの激しい生と同じくらい高密度な生を生きた者にしか許されないのではないかと考えてくる。ボードレー尔を語るその筆致から浮かび上がってくるのは、ちょうどあのロラン通りで見つけたプレートに記されていた次の一節が語るような一人の人間の顔である。

souvenez-vous seulement que j'étais innocent
et que, tout comme vous, mortels de ce jour-là,
j'avais eu, moi aussi, un visage marqué
par la colère, par la pitié et la joie,
un visage d'homme tout simplement !

²⁰ Emmanuel, *op.cit.*, p.90.